台湾道教打城科儀についての初歩的考察
A Rudimentary Consideration on the Daoist Attack on Hell Rite in Taiwan

山田　明広
Akihiro Yamada

要旨（Abstract）

台湾道教の死者救済・追善供養の儀礼（＝功徳儀礼）を構成する儀式の一つに、「打城」という儀式がある。この儀式は、亡魂を地獄より直接的に救い出すことを目的として行われ、その中では、道士が実力行使により地獄の中にある城門を打ち破り、そこから亡魂を救出するということが演劇的に表現される。本稿は、このような台湾道教の「打城科儀」の実施される条件や使用される糊紙製の地獄の城、科儀の内容、構成といった基礎的事項について、台南地域のものと高雄・屏東地域のものを相互に比較することで地域的差異にも留意しつつ考察したものである。本稿における考察により、現代の台湾南部地域で見られる打城科儀の具体像および台南地域と高雄・屏東地域の打城科儀の共通点や相違点が明らかとなった。

キーワード：（道教）、（道教儀礼）、（功徳儀礼）、（打城科儀）、（台湾）

一、はじめに

台湾において人が死去すると、多くの場合、『家礼』[1] を土台とした儒教的な喪葬儀礼が行われる。ただし、全ての面をこの儒教的な喪葬儀礼によってカバーできるわけではなく、民衆の亡魂を地獄から救済したいという希求には、そもそも儒教においては地獄のような死後の世界が想定されておらず、その術がないため、十分に答えることができない。したがって、民衆は、人が死去した場合、儒教的な喪葬儀礼を土台としつつも、道教式あるいは仏教式の死者救済・追善供養の儀礼を併用して、亡魂の安定を祈願するのである。

道教式の死者救済・追善供養の儀礼は、現在、台湾では、「斎」ないし「功徳」、「做功徳」などと称され[2]（以降、「功徳儀礼」と表現する）、一連の喪葬儀礼のうちの做旬ないし做七と呼ばれる部分[3] において、烏頭道士[4]

---

[1] 台湾で流布している『家礼』は、南宋・朱熹の『朱子家礼』に福建の習俗を取り入れ同地域で用いるのにふさわしい形に調整した、清・呂子振編『家礼大成』や清・張汝誠編『家礼会通』などである。李豊楙「台灣齋儀與喪葬禮俗複合的魂魄觀」（李豊楙・朱栄貴主編『儀式、廟會與社區　道教、民間信仰與民間文化』、中央研究院中國文哲研究所、1996年）、460-461頁参照。

[2] 台湾道教の功徳儀礼については、浅野春二『飛翔天界 道士の技法』（春秋社、2003年）、同「斎の種類と程序」（浅野春二『台湾における道教儀礼の研究』、笠間叢書、2005年、第二章第三節）、丸山宏「台南道教の功徳儀礼」（丸山宏『道教儀礼文書の歴史的研究』、汲古書院、2004年、第二部第四章）および拙稿「道教の功徳儀礼の科儀について－台南市の一朝宿啓の功徳を例として－」（拙稿『台湾道教における斎儀－その源流と展開－』、大河書房、2015年、第二部第三章）等参照。

[3]「做旬」あるいは「做七」については、徐福全『台湾民間伝統喪葬儀節研究』（国立台湾師範大学国文研究所博士論文、1984年）429-452頁参照。

と称される正一系の道士により挙行される。これは、道教の伝統的な「黄籙斎」の中でも専ら死者救済のために行われる「開度黄籙斎」の系譜を引くもの[5]で、規模によりその数は異なるが、「発表」や「放赦」、「沐浴」、「過橋」などといった数個から数十個の科目[6]により構成さる。そして、道士たちはある程度定式化したプロセス[7]に沿ってこれらの科目を行っていくことで、亡魂を地獄から救済するのである。

さて、このような台湾道教の功徳儀礼を構成する科目の一つに、「打城」と呼ばれる科儀[8]がある。この科儀は、亡魂を地獄より直接的に救い出すことを目的として行われ、その中では、道士が実力行使により地獄の中にある城門を打ち破り、そこから亡魂を救出するということが演劇的に表現される。そして、亡魂が地獄から救済されることが視覚的に分かりやすく表現されているため、亡魂の地獄からの救済を切に願う遺族からは特に重視されている。

本稿では、このような台湾道教の「打城科儀」について、台南地域のものと高雄・屏東地域[9]のものを比較することで地域的差異にも留意しつつ、科儀の実施条件や内容、構成などを分析するといった初歩的な考察を行いたい。

二、打城科儀が行われる条件

台湾道教の打城科儀は、人が死去して功徳儀礼が実施される場合には必ず行われる、といったものではなく、亡者の死因によっては行われない、あるいは別の類似の科儀が行われることがある。また、このような打城科儀が行われる条件については、台湾全土を通じてすべて同じというわけではなく、地域により相違が見られる。そこで、ここでは、台湾道教の打城科儀がいかなる死因の下でおこなわれるのかについて、台南地域と高雄・屏東地域とに分けて見てみたい。死者の死因は、多くの場合、横死（異常死）と通常死とに分類されるので、ここでも、その分類に沿って考察を進めていく。

1、台南地域

a．横死

台南地域では、人が横死した場合、その亡魂は酆都九幽地獄[10]中の「枉死城」に幽閉されると考えられている。

---

(4) 台湾中南部に分布し、功徳などの死者救済儀礼と祈安醮などの生者救済儀礼のいずれをも行う道士のこと。台湾道教の教派の分類およびその職能と分布については、謝聡輝・呉永猛共著『台湾民間信仰儀式』（国立空中大学、2005年）、10-13頁、および李豊楙・謝聡輝合著『台湾斎醮』（国立伝統芸術中心籌備処、2001年）、20-31頁参照。

(5) 黄籙斎は、南宋から明にかけて、この専ら死者救済のために行われる「開度黄籙斎」と生者救済の祈安儀礼としての「祈禳黄籙斎」とに分化したとされる。丸山宏「c 祈安儀礼」（田中文雄・丸山宏。浅野春二編『講座道教』第２巻、道教の教団と儀礼、雄山閣出版、2000年）、314頁。

(6) 祈安醮や功徳儀礼などといったひとまとまりの道教儀礼を構成する小儀式をここでは「科目」と称する。また、功徳儀礼を構成する主要な科目の詳細については、浅野春二注２・2003年前掲書および拙稿注２前掲書参照。

(7) 道士たちが功徳において行う科目構成は、儀礼中通して貼り出される「榜文」および儀礼中ずっと科儀卓上に置かれ時折宣読される「手上疏文」という文書（いずれも、功徳を行う目的や日時、亡魂および遺族の名、功徳のプログラムなどが記された文書）に記されているが、これらの文書は実情に応じて改変が加えられるものの、基本的には「文検」という文書の模範例文集を参考にして作成され、「文検」の中ですでに功徳の規模や種類に応じてどのような科目をどのような順番で行うかが決められている。ただし、すべてがこの「文検」あるいは「榜文」、「手上疏文」に記されている科目構成に沿って行われるのではなく、時間や状況に応じて科目が増減されたりすることもある。

(8) 科儀とは、経文を読誦するだけでなく、高位の神に謁見するなどといった内容を含み、多くの動作を伴ったやや複雑で難度の高い科目のことを指す。

(9) 本稿では、台湾南部地域（台南市以南地域）を高雄市路竹区を境界として分割し、それより以北の地域を台南地域、以南の地域を高雄・屏東地域とする。

(10) 酆都九幽地獄については、澤田瑞穂『修訂 地獄変』（平河出版社、1991年）、9-11頁参照。

そして、このような場合、打城科儀を行って亡魂を救済する必要があるとされる。ただ、「横死」にもいくらか種類があり、打城科儀を行う必要があると考えられている横死としては、およそ以下のような死因が挙げられる。

・早世（数えで50歳、地域によっては60歳未満で亡くなり、天寿を全うしていない）

・事故死（交通事故死の場合は、先に「打車関科儀」を行い、その後「打城科儀」を行う）

・自殺（縊死の場合は、先に「抽楹放索科儀」を行い、その後「打城科儀」を行う）

・殺人死など

上記以外の横死に相当する死因により人が死去した場合、亡魂は「枉死城」ではなく別の場所に幽閉され、打城科儀ではない別の科儀を行って救済する必要があると考えられている。すなわち、流血死の場合、亡魂は「血盆城」あるいは「枉死城」に幽閉され、「打血盆科儀」あるいは「打城科儀」を行うべきであるとされ、水死の場合、亡魂は「酆都九幽地獄」ではなく、「水府地獄」という別の地獄の中にある「水牢獄」あるいは「水湖獄」に堕ち、「転水轆科儀[11]」を行うか、あるいは「転水轆科儀」を行った上にさらに「打城科儀」を行う必要があるとされている。また、難産死の場合には、亡魂は「酆都血湖地獄」というまた別の地獄に堕ち、一般の功徳儀礼ではなく「血湖功徳[12]」という特殊な功徳儀礼を行って救済する必要があると考えられている。この「難産死」の場合には、死に際して流血を伴うことが多く、したがって、その亡魂は「酆都血湖地獄」に堕ちると同時に「血盆城」にも幽閉されると見なされる場合もある。ちなみに、「血湖功徳」を行う場合、通常、「打城科儀」は行われず、その代わりにそれに相当する科儀として「転血轆科儀[13]」が行われる。

b．通常死

次に、台南地域の通常死の場合について見てみたい。台南地域では、数えで50歳以上（地域によっては60歳以上）で亡くなり、かつ横死でないことが通常死であると考えられており、この場合、亡魂が死後にどこへ行き、どのようにして救済すべきかについては、同じ台南地域の中でも、地域や儀礼を行う道士の方針の違いにより、以下の四種のものが存在する。

①亡魂は酆都九幽地獄中の「枉死城」には幽閉されず、打城科儀は行う必要はない。

②男性の亡魂は「盆城」、女性の亡魂は「血盆城」に幽閉され、いずれも「打盆科儀」を行う。

③亡魂は性別に関係なく「盆城」に幽閉され、「打盆科儀」を行う。

④亡魂は性別は関係なく「血盆城」に幽閉され、「打盆科儀」を行う。

以上が台南地域の打城科儀あるいはその類似の科儀が行われる条件となる。上で挙げた科儀のうち、「打城科儀」と「打血盆科儀」および「打盆科儀」は名称の違いのみでほぼ同じ内容の科儀となるが、これら以外の「打車関科儀」、「抽楹放索科儀」、「転水轆科儀」、「転血轆科儀」は、「打城科儀」とは内容が大きく異なる。そこで、本稿では、台南地域の「打城科儀」と「打血盆科儀」と「打盆科儀」を合わせて台南地域の打城関連科儀と称することとする。議論の便を図るため、ここまで見てきたことを表に整理して示すと、次頁の表１ようになる。

---

(11) 転水轆科儀については、拙稿「台湾道教の水死者救済儀礼とその文書」（『東西学術研究所紀要』第45輯、2012年）参照。

(12) 血湖功徳については、拙稿「道教血湖儀礼の初歩的考察－台湾南部地区を例として－」（『関西大学中国文学会紀要』第35号、2014年）参照。

(13) 転血轆科儀については、拙稿注12前掲論文参照。

表１：台南地域

死因	亡魂が幽閉される場所	対応する科儀・儀礼
横死	枉死城	打城科儀
事故死	枉死城	打車関科儀 → 打城科儀
縊死	枉死城	抽楹放索科儀 → 打城科儀
流血死	血盆城または枉死城	打血盆科儀または打城科儀
水死	水府地獄中の水牢獄または水湖獄	転水轍科儀
難産死	血湖獄さらに血盆城	血湖功徳（玉籙血湖抜産斎）
正常死	無しまたは盆城、血盆城	無しまたは打盆科儀

２、高雄・屏東地域

ａ．横死

続いて、高雄・屏東地域の横死の場合について見ていきたい。高雄・屏東地域においても、人が横死した場合、その亡魂は酆都九幽地獄中の「枉死城」に幽閉され、「打城科儀」を行ってその亡魂を救済する必要があると考えられている。高雄・屏東地域では、「打城科儀」は「探城科儀」とも称されるが、この「打城科儀」を行うべきであると考えられている横死に当たる死因には、およそ以下のようなものがある。

・事故死（交通事故死の場合は、先に「打車関科儀」を行い、その後「探城科儀」を行う）

・流血死

・自殺（縊死を除く）

・殺人死など

上記以外の横死に当たる死因により人が死去した場合、台南地域と同様に、亡魂は「枉死城」ではなく別の場所に幽閉され、打城科儀ではない別の科儀を行って救済する必要があると考えられている。すなわち、縊死の場合、亡魂は酆都九幽地獄の枉死城中の「放索台」に繋がれ、「絞台放策科儀[14]」を行うべきであるとされ、水死の場合、水府晶宮中の「水湖獄」に堕ち、「転水轍科儀」を行うべきであるとされている。また、難産死の場合には、亡魂は「酆都血湖地獄」に堕ち、「血湖功徳」という特殊な功徳儀礼を行うべきであるとされている。ちなみに、高雄・屏東地域の「血湖功徳」においても、台南地域のものと同様、打城科儀に相当する科儀として「転血轍科儀」が行われる。

ｂ．通常死

次に、高雄・屏東地域の通常死の場合について見てみたい。高雄・屏東地域では、台南地域とは異なり、年齢に関係はなく横死でないことが通常死と見なされている。そして、このような場合、亡魂は酆都九幽地獄中の「血水盆」または「血盆」に幽閉され、「踩盆科儀」（「打盆科儀」とも称される）を行う必要があるとされる。

以上が高雄・屏東地域の打城科儀あるいはその類似の科儀が行われる条件となる。ここまで見てきた科儀のうち、横死の場合に行われる「探城科儀」（＝「打城科儀」）と通常死の場合に行われる「踩盆科儀」（＝「打盆科儀」）は、台南地域と同様、ほぼ同内容となる。一方、「打車関科儀」と「絞台放策科儀」、「転水轍科儀」、「転血轍科儀」は、

[14] 台南地域で縊死の場合に行われる抽楹放索科儀および高雄・屏東地域で縊死の場合に行われる絞台放策科儀については、拙稿「台湾道教の縊死者に関する儀礼とその地域的差異－高雄・屏東地域と台南地域の比較を中心に－」（『東西学術研究所紀要』第44輯、2011年）参照。

「探城科儀」とは内容が大きく異なる。したがって、本稿では、高雄・屏東地域の「探城科儀」（＝「打城科儀」）と「踩盆科儀」（＝「打盆科儀」）を合わせて高雄・屏東地域の打城関連科儀と称することとする。議論の便を図るため、ここまで見てきたことを表に整理して示すと、以下の表２ようになる。

表２：高雄・屏東地域

死因	亡魂が幽閉される場所	対応する科儀・儀礼
横死	枉死城	探城科儀（＝打城科儀）
事故死	枉死城	打車関科儀　→　探打城科儀
縊死	枉死城中の放索台	絞台放索科儀
水死	水府晶宮中の水湖獄	転水轍科儀
難産死	血湖獄	血湖功徳（玉籙血湖拔産斎）
正常死	血水盆または血盆	踩盆科儀（＝「打盆科儀」）

３、台南地域と高雄・屏東地域の比較

最後に、打城関連科儀が行われる条件について、台南地域と高雄・屏東地域を比較してみたい。まず、台南地域と高雄・屏東地域では、ともに横死の場合に「打城科儀」が行われるということが分かる。ただ、何をもって横死とするかということについては、台南地域と高雄・屏東地域とで異なり、台南地域では横死に早世（数えで50歳ないし60歳未満で亡くなること）が含まれるが、高雄・屏東地域では横死に早世が含まれないという違いが見られる。また、高雄・屏東地域では、通常死の場合でも必ず「踩盆科儀（＝打盆科儀）」という打城科儀と類似の科儀が行われるが、台南地域では、通常死の場合、亡魂は地獄の城には幽閉されないと見なされ、打城関連の科儀は何も行われない場合があるといった違いも見られる。

ここまでの考察により、両地域とも打城関連科儀が行われる場合、その対象となる亡魂は、基本的に枉死城や盆城、血水盆などといった酆都九幽地獄の中にある城に入ることになっていることが分かったが、こういった地獄中の城は、実際に儀式を執り行うに当たっては、基本的に糊紙製品として具現化される。それでは、次に、こういった儀式で使用される糊紙製の地獄の城について、それぞれいかなるものであるのか、台南地域と高雄・屏東地域とに分けて見てみたい。

三、打城科儀で用いられる糊紙製の地獄の城

１、台南地域

まず、台南地域の糊紙製の地獄の城について見てみたい。筆者の経験によれば、曾文渓以南の台南地域で使用される枉死城、血盆城、盆城はすべて、次頁の写真１から写真３が示すように、その形状はみな同じ直方体状であり、ただ名称と色が異なるのみである。一方、曾文渓以北の台南地域で使用されるものは、次頁の写真４および写真５が示すように、立方体状であり、しかも、卓上に置いて使用される。このように、台南地域の糊紙製の地獄の城は、曾文渓以南と以北とで、その形状が大きく異なる。

２、高雄・屏東地域

次に、高雄・屏東地域の糊紙製の地獄の城について見てみると、まず、正常死の場合に使用される血盆あるいは血水盆（両者は言い方が異なるのみで、同じものを指す）については、次頁の写真６および写真７が示すように、２種類ものが存在する。写真６が示すものは、曾文渓以南の台南地域で使用される地獄の城と同様に、白い直方体

状であるが、写真７が示すものはこれとは異なり、赤い円柱形をしている。筆者の経験および道士への聞き取りによれば、同じ高雄・屏東地域でも、高雄市左営区以北の「頂頭」と呼ばれる地域では写真６のような色と形状をしたものが使用され、高雄市左営区以南の「下頭」と呼ばれる地域では写真７が示すような色と形状をしたものが使用されるようである。ただ、いずれの地域のものであっても、正常死の場合に使用される血盆（＝血水盆）の下には必ず水盆（水を張った洗面器）が置かれる。この点は、台南地域とは大きく異なる点であると言えよう。一方、横死の場合に使用される枉死城に関しては、地域差は見られず、いずれも写真８が示すような白い直方体状をしている。以上より、高雄・屏東地域の糊紙製の地獄の城について述べると、正常死の場合には同じ高雄・屏東地域内

写真１：枉死城（曾文渓以南）

写真２：血盆城（曾文渓以南）

写真３：盆城（曾文渓以南）

写真４：枉死城（曾文渓以北）

写真５：血盆城（曾文渓以北）

写真６：血水盆（頂頭）

写真７：血水盆（下頭）

写真８：枉死城（頂頭、下頭共通）

でも地域により異なる色・形状のものが用いられるが、横死の場合には地域に関わらずいずれも同じ色・形状のものが用いられると言えよう。

四、打城科儀の内容および構造

ここまで、打城科儀が行われる条件や打城科儀で用いられる糊紙製の地獄の城などといった、いわば打城科儀に付随する事項について検討し、肝心の中身については触れてこなかったが、ここからは、その中身について見ていきたい。まず、台南地域および高雄・屏東地域それぞれの地域の打城科儀について、筆者が実際に調査した事例にもとづきつつその内容を描写してみたい。

1、台南地域の打城科儀の事例とその内容 (15)

事例１：台南穎川道壇無上十廻抜度大斎功徳（2004年１月10～11日、陳栄盛道長主持）の第１日目（10日）において行われた打城科儀

・場所：亡者宅前の道路

・参加者：陳道長、補助の道士、楽師、亡者の遺族

・使用文書：手上疏文（功徳疏文）一道

・使用された糊紙製の地獄の城：枉死城

①上香、三跪九拝

遺族らが枉死城に向かって三拝・上香してから、三跪九拝する。そして、半円形に並んで枉死城を背後から取り囲む。

②歩虚

高功（中心となって儀礼を行う道士）の任に当たっている陳道長が「半歩虚 (16)」を歌う。

③浄壇

陳道長が「浄壇呪 (17)」を唱えつつ周囲に浄水を撒くことで、壇を浄化する。

④開光

まず、陳道長が鶏の鶏冠を切って小筆に血を付着させ、その血を枉死城上部の神々および城の中の替身（亡魂の替わりをするもの）の目や鼻などに点を打つように塗り付ける。その後、補助の道士が龍角（牛の角の形状をした笛、法器の一種）を吹く中、陳道長が火を点けた金古紙（黄色い紙を円錐状に丸めたもの）を枉死城の周囲に三度かざして浄化する。これにより、神々や替身は単なる紙の作り物から魂のこもったものへと変化する。

⑤焚香奏啓請神

楽師が太鼓と銅鑼をたたき、補助の道士が龍角を吹く中、陳道長がまず香を献じる。その後、帝鐘（法具として

---

(15) 本節において事例１の打城科儀の内容を叙述するに当たっては、大淵忍爾『中国人の宗教儀礼 仏教・道教・民間信仰』（福武書店、1983年）、502-510頁所載の「無上九幽打城抜度科儀」を参照した。

(16) ここで歌われる内容は、「超度三界難、地獄五苦解、悉歸太上經、静念稽首禮」となる。これは、「三啓頌第三の後半部分」に当たり、現行『道蔵』の中では、『玉音法事』（『道蔵』ＳＮ.607）巻上、一二ａ～一二ｂ、および巻下、二九ｂ～二九ｂなどに見られる。

(17) ここで唱えられる内容は、「琳琅振響、十方肅清、河海静默、山獄呑煙、萬靈振伏、招集郡仙、天無氛穢、地無祆塵、冥慧洞清、大量玄玄也、十方肅清天尊」となる。現行『道蔵』の中では、『霊宝無量度人上品妙経』（『道蔵』ＳＮ.1）に度々同じ一節が現れる。

の鈴）を鳴らしながら、道教および土地里域の神々の名を高位の者から低位の者へと順に唱えることで、これらの神々が壇へと来臨するよう請願する。

⑥上香初・再・三献酒

壇へと来臨してきた神々に対して上香し、献酒するということを三度繰り返す。

⑦入意

陳道長が「手上疏文」を宣読する。その間、遺族らは陳道長の後ろで跪く。陳道長が読み終わると、遺族らは再び枉死城の後方へと戻り、半円形に並んで枉死城を取り囲む。

⑧志心持念

陳道長および楽師が太乙救苦天尊、名上南宮天尊、罪消北府天尊、逍遥快楽天尊、雷声普化天尊といった神々の名を唱えることで、これらの神々に吉慶をもたらすよう請願する。

⑨上謝

楽師が太鼓と銅鑼をたたき、補助の道士が龍角を吹く中、陳道長が、まず、帝鐘を鳴らしながら三清以下壇へと来臨してきた神々の名を唱え、その後、香によってこれらの神々を普く供養せんことを述べる。そして、大道や真聖らの偉大さを讃えるとともに、斎主（＝遺族）が平安で長生きし福を獲得することができるよう請願する五字句を唱える。

⑩化紙呪

陳道長が「化紙呪」を歌い、補助の道士が金紙を焼くことで、金品を神々に奉げる。

⑪妙行真人の登場

陳道長が、まず、浄水を撒いて壇を浄化する。次に、宝革（矛のような法具）と黍米（＝払子）を手に執り、火を点けた金古紙で空中に「一心」という文字を描き、その金古紙を地面に落とす。これにより、陳道長は妙行真人に扮する。その後、左手に宝革を、右手に黍米を持ち、右手の黍米を振りつつ、元始天尊が法を説いて多くの人々を救済してきたこと、および、昔、龍虎山中に道法を学び、道が成るまで心を休めないと誓ったことなどを述べた歌を歌う。

⑫対答

陳道長が妙行真人を演じ、太鼓担当の楽師が鬼卒を演じることで、妙行真人と鬼卒との間の掛け合いの劇が行われる。この劇は、閩南語の文言文と白話文とが混在した言葉によって行われ、そのおおよその内容は以下のようになる 。

> 妙行真人は亡魂を地獄から開放するため地獄の入り口の鬼門関までやってくるが、鬼門の守衛である鬼卒は妙行真人を中へ入れようとしない。そこで、鬼門を開けさせるべく、妙行真人と鬼卒との種々のやりとりが行われ、鬼卒に経文を聞かせることでようやく鬼門を開けさせることができる。そして、妙行真人は鬼門を通り、手枷をはめられ、ざんばら髪で血を流しているような罪人が多数存在する黄泉大路へと至り、そこを通り過ぎて亡魂が幽閉されている枉死城まで至る。しかし、枉死城の門番の鬼卒もまた妙行真人を中に入れようとせず、ついに妙行真人は徐甲真人となって五営神兵の助けを借りて実力行使により枉死城を破ることに決める。

⑬徐甲真人への変身

陳道長が頭に赤色のはちまきを巻き、袖を捲りあげることで、妙行真人から徐甲真人へと変身する。

⑭「三直符」、五営神兵の召出

まず、陳道長が、手に香を持ち帝鐘を鳴らしながら「三直符[18]」を唱え、上・中・下界の直符使者を召請する。

この時より、遺族らは、枉死城を手で揺らし始める。続いて、楽師が太鼓と銅鑼を鳴らし、補助の道士が龍角を吹く中、陳道長が五方各方に火の点いた金古紙を置いて行くことで、五営神兵を召出する。

⑮枉死城の打破

まず、陳道長が浄水を口に含み、左掌の上に勅板で「速」の字を書き、両手で破地獄檄（仏教で言う「印」のようなもの）を結んで枉死城まで近づき、枉死城の手前で破地獄檄を解くと同時に枉死城に向かって噀水する。続いて、五営神兵に対して「道童、助我三通法鼓、倩破枉死城、領法旨（道童たちよ、私が法を三度説き、速やかに枉死城を破るのに助力せよ、法の命を受けよ）」と命ずる。そして、宝革の先に着けた金古紙に火を点け、その宝革を用いて枉死城の門を打破する。

⑯引魂

陳道長が道旛（召魂旛）の先を枉死城の中に入れ、そして、引魂童子や召魂主吏などといった引魂を司る神々に亡魂を壇へと連れてくるよう請願するとともに、亡魂が法食を受け、功徳を得、法や経を聞き、仙界へと往生するよう請願する呪文を唱える。これにより、亡魂を壇へと呼び寄せる。

⑰筊による成否の確認

陳道長が孝男（亡者の男子の子）に筊を投げさせることで、救済しようとする亡魂が壇へと至ったかどうか確認する。聖筊が出れば成功ということになるが、聖筊が出なければ、道旛の先を再び枉死城の中に入れて呪言を唱えたり、異なる質問をしたり、あるいは筊を孝男以外の遺族に投げさせたりする。

⑱魂身を携えて霊堂へ移動する

補助の道士が枉死城の上の替身を外し、孝男の背中に紐で結びつける。孝男は、他の遺族から傘をさしかけられつつともに霊堂へと向かう。

⑲倒城、押煞

まず、補助の道士が枉死城を倒して後、箒に取り付けた爆竹に火をつけ、箒を枉死城にかざすようにして爆竹を鳴らす。そして、その箒を使って枉死城およびその周囲を叩く。続いて、陳道長が、莫莚を巻いて棒状にして両端に金古紙を付けたものを手に執り、両端の金古紙に火を点けて胸の前で円を描く様に回した後、倒された枉死城の周囲および枉死城そのものを叩く。最後に、塩米を枉死城およびその周辺に撒く。このようにして煞気を祓うことで、儀式終了となる。

２、高雄・屏東地域の打城科儀の事例とその内容[19]

事例２：高雄彌陀靜乙道壇霊前繳（2009年３月17日、蔡志民道長主持）において行われた打盆科儀

・場所：高雄県路竹郷甲北村の亡者宅前の道路

・参加人：蔡道長、楽師、死者の遺族

・使用文書：なし

・使用された糊紙製の地獄の城：血水盆

①上香、三跪九拝

遺族が枉死城に向かって上香し、三跪九拝する。

---

[18]「三直符」の内容については、大淵忍爾注15前掲書、706-707頁参照。

[19] 本節において事例２が示す打城科儀の内容を叙述するに当たっては、郭枝春道長手抄の科儀本『採盆探城科儀』を参照した。

②歩虚

半歩虚（三啓頌第三の後半部分[20]）を歌う。

③浄壇

浄壇呪[21]を唱い、壇を浄化する。この後より、女性の遺族たちが、亡者の名前を叫びながら血水盆を揺らす。

④血水盆の開光

鶏の血を用いて血水盆の開光を行う。

⑤焚香請神

焚香により、三清上聖、東極青宮救苦天尊などといった高位の神々を壇へと請来する。

⑥上香三献酒

壇へと請来した神々に対して三献酒を行う。

⑦入意

訃聞を宣読する[22]。

⑧焚香請神、化財功養

焚香により、五方の血水盆大神、土地里域の神などを壇へと請来し、これらの神々に供養を施す。

⑨「思念太乙救苦天尊」を歌う

救苦天尊を思念し、亡魂の罪を赦すよう祈求するという内容の四句の詞を歌う。この際、蔡道長が男性の遺族たちを従え科儀宅およびその後ろにある血水盆の周辺を旋繞する。旋繞の際、男性の遺族のうち先頭に位置する者が手に炉を持つ。

⑩妙行真人に扮する

蔡道長が「生錦地」を歌いながら舞剣を行い、妙行真人に変身する。

⑪対答、過関

妙行真人に扮した蔡道長が、楽師扮する各所の役人や門番と閩南語の口頭語により対話する。対話中、妙行真人が三宝殿前から出発して、順番に三堆→鬼門関といった関を過ぎて行き、三教報恩宮、そして最終的に亡魂のいる血水盆まで到達する様子が表現される。対話中、関を過ぎるたびに、⑨で記したのと同様にして科儀宅およびその後ろにある血水盆の周辺を旋繞する。科儀宅および血水盆の周辺を旋繞することは、関を越えたことを意味する。

⑫一百二十拝、「十月懐胎」を歌う

男性の遺族が血水盆を120回拝し、その間、蔡道長は、道旛の裾を血水盆に向けて垂らしつつ「十月懐胎」を歌う。

⑬徐甲真人に扮する

妙行真人に扮していた蔡道長が、頭に赤い鉢巻をすることにより、徐甲真人に扮する。

⑭調五営

まず、龍角を吹きつつ火を点けた紙銭花により壇を浄化し、その火を点けた紙銭花を科儀宅前の五方に撒く。次に、龍角および五営旗を（緑→赤→白→黒→黄の順に）用いて五営兵将を召請する。最後に、都講が七星剣を用いて東→南→西→北→中の順で喋水を伴いつつ舞剣を行う。

---

[20] 注16に同じ。

[21] 注17に同じ。

[22] 本来は「手上疏文」を宣読すべきであるが、本打盆科儀が行われたのは「霊前繳」という小規模の功徳儀礼の中であったため、「手上疏文」が準備されず、その代わりとして「訃聞」が宣読された。

⑮血水盆を打破する

蔡道長が、手訣を結び、噀水した後、七星剣にて血水盆を破る 。この前より神がかった神轎が儀式に介入しており、蔡道長が血水盆を破った後、さらに血水盆を破り倒す。神がかった神轎は、遺族が住んでいる地域の守護神が憑依しているものであり、神轎が血水盆を破ることは、地域の守護神が亡魂を地獄からの救済するのに参与していることを意味する。

⑯魂身を携えて霊堂へ移動する

血水盆上の魂身を外し、孝女の背中に結びつける。孝女は、他の遺族から傘をさしかけられつつともに霊堂へと向かう。

⑰押煞

別の道士が、莫蓙を巻いて両端に金古紙を付けたものを手に執り、両端の金古紙に火を点けて胸の前で円を描く様に回した後、倒された血水盆の周囲および血水盆そのものを叩くことにより、煞気を祓う。

３、台南地域と高雄・屏東地域の打城科儀の比較

ここまで、筆者が実際に調査した事例にもとづきつつ台南地域と高雄・屏東地域の打城科儀の内容を叙述してきたが、これにより両地域の打城科儀の具体像がかなり明らかになったかと思われる。それでは、ここでは、両者を比較してその共通点や相違点を洗い出すとともに、そこから各地域の打城科儀の特徴をあぶり出したい。比較の便に供するため、両者の構造を並べて示すと、以下のようになる。

表３：台南地域と高雄・屏東地域の打城科儀の構造比較表 (23)

	台南地域の打城科儀（事例１）	高雄・屏東地域の打城科儀（事例２）
開科	①上香、三跪九拝 ②歩虚 ③浄壇 ④開光	①上香、三跪九拝 ②歩虚 ③浄壇 ④開光
酌献	⑤焚香奏啓請神 ⑥上香初・再・三献酒 ⑦入意 ⑧志心持念 ⑨上謝 ⑩化紙呪を歌う	⑤焚香請神 ⑥上香三献酒 ⑦入意 ⑧焚香請神、化財功養 ⑨「思念太乙救苦天尊」を歌う
赴地獄城	⑪妙行真人に扮する ⑫対答 １：鬼門関前での鬼卒との問答 ２：鬼門関の関門を開く ３：黄泉大路を過ぎる ４：枉死城の門前での鬼卒との問答	⑩妙行真人に扮する ⑪対答、過関 １：三宝殿前での問答 ２：三堆での問答、三堆を過ぎる ３：鬼門関での問答、鬼門関を過ぎる ４：三教報恩宮での問答 ５：枉死城に至る ⑫一百二十拝、「十月懐胎」を歌う
破獄出城	⑬徐甲真人に変身する ⑭五営神兵を召出する（三直符） ⑮枉死城を打破する ⑯召魂 ⑰筊により成否を確認する ⑱魂身を携えて霊堂へ移動する ⑲倒城、押煞	⑬徐甲真人を召出する ⑭五営軍兵を召出する（調五営） ⑮枉死城を打破する ⑯魂身を携えて霊堂へ移動する ⑰押煞

これらより、まず、台南地域と高雄・屏東地域の打城科儀の構造を比較してみると、およそ次のようなことが言える。まず、基本構造については、両地域ともに開科→酌献→赴地獄城→破獄出城とすることができ、ほぼ同じということができる。細節についても、いくつか異なる部分はあるものの、おおまかな流れは類似していると言えよう。したがって、両地域の打城科儀は、その構造という点から見れば、かなり類似していると言える。しかし、だからといって、両者はまったく同じというわけではなく、その細かな内容を比較すると、大きく異なる部分も見られる。そこで、以下、内容の相違について見てみたい。

まず、両地域とも閭山派の紅頭法[24]を用いて五営神兵を召出しているが、その方法として台南地域では「三直符」という方法が、高雄・屏東地域では「調五営」という方法が用いられているという相違が見られる。これらは、「道」の部分ではなく、「法」の部分に関わる技法であるが、同じ五営神兵を召出するにしても、それぞれ異なる技法が用いられているという点で、台南地域と高雄・屏東地域とでは「道」の伝統のみならず、「法」の伝統も異なるということが言えると考えられる。次に、いずれの地域の打城科儀においても、儀式中に遺族が枉死城を揺らすという場面が見られるが、台南地域では枉死城を揺らす遺族の性別に男女の区別が見られないのに対し、高雄・屏東地域では枉死城を揺らすのは女性の遺族のみとなっている。また、高雄・屏東地域の打城科儀においてのみ、儀式中、男性の遺族に枉死城を120回拝させるということが行われる。これらは、道士の行為ではなく、遺族の行為に関わることであり、したがって、打城科儀に関わる地域の習俗において、台南地域と高雄・屏東地域では大きな相違が見られると言える。後、閩南語の口頭語にて行われる「対答」の部分について、いずれも妙行真人と徐甲真人が出現するが、たとえば、妙行真人がどこを通って枉死城にまで至るかといったことなど、その内容には多くの相違が見られる。また、高雄・屏東地域のみこの「対答」の部分において「十月懐胎」といった節次が見られる。この「対答」の部分については、同じ地域内でも、どの道壇の道士が行うかにより異なることがある。あるいは、全く別地域にある道壇に属する道士同士であっても、両者が行うものを比較すると、ほぼ同内容になる場合もある。すでに前述してあるように、この「対答」の部分は、基本的に閩南語の口頭語にて行われる部分であり、筆者は、道教の伝統の上にさらに「戯劇」を取り入れた部分であると推測している。多くの台湾人の本籍地となっている中国福建省泉州市には、「打城戯」と呼ばれる戯劇が今でも行われているが、筆者は現在台湾で見られる打城科儀の成立には、この「打城戯」が大きく関わっているのではないかと考えている。この点については、今後の課題としたい。ちなみに、高雄・屏東地域にのみ見られる「十月懐胎」については、台南地域では、功徳儀礼を構成する科目の一つである「填庫科儀」において歌われるものであり、高雄・屏東地域特有のものではない。

五、おわりに

以上、台湾道教の打城科儀について、その実施条件や使用される糊紙製の地獄の城、内容、構成といった基本的事項を、台南地域と高雄・屏東地域の地域的差異に留意しつつ考察した。そして、これにより、現代の台湾南部地域で見られる打城科儀の具体像をかなり明らかにすることができた。

本稿では、紙幅の関係上、および筆者の力量の関係上、その対象とする時代は現代のみであり、また、その対象とする地域も台湾南部地域のみとかなり限られたものとなってしまった。『道蔵』等古文献を用いた歴史的考察や

---

(23) 本表を作成するに当たっては、黄佳琪『道教打城儀式之音楽研究』（国立台湾師範大学民族音楽研究所碩士論文、2005年）、24-27頁を参考とした。

(24) 閭山派の紅頭法については、王釗雯『臺南市小法團之研究』（国立台南大学台湾文化研究所碩士論文、2005年）および洪瑩發他著『臺南傳統法派及其儀式』（台南市政府文化局、2013年）参照。

中国大陸の原籍地において見られものとの比較・検討など、まだまだ取り組むべき課題は多い。今後、こういった問題を一つ一つ解決してゆき、ゆくゆくは台湾道教の打城科儀の成立に繋げていきたい。